日赤看会誌　J Jpn Red Cross Soc Nurs Sci Vol.10, No.2, pp.43-46, 2010

日本赤十字看護学会10周年記念

# 赤十字の看護と赤十字看護学会への期待

# Nursing of Red Cross and Anticipation of The Japanese Red Cross Society of Nursing Science

浦田喜久子　Kikuko Urata　　（日本赤十字社事業局看護部）

キイワード：赤十字の看護、日本赤十字社の看護教育、日本赤十字社の活動、日本赤十字看護学会への期待
key words：Nursing of red cross, Nursing education of Japanese Red Cross Society, Activity of Japanese Red Cross Society, Anticipation of The Japanese Red Cross Society of Nursing Science

## Ⅰ．赤十字看護教育の変遷

日本赤十字社は、明治10年西南の役に端を発し、敵味方区別なく救護する組織として博愛社を設立した。明治19年、救護員養成を第一目的として赤十字病院（当時、博愛社病院）を設立し、明治23年に看護師養成を開始した。

その後、全国各支部での養成も行われるようになり、現在約120年の歴史を有している。

昭和29年には、日本赤十字女子短期大学を開学し、昭和41年、学校法人日本赤十字学園を設立して高等教育ができる環境を整えた。

医療・看護の高度化や高学歴志向等の教育を取り巻く環境に対応して、平成10年に、「日本赤十字社の看護師養成の基本的方向」が策定された。これに基づき、全国７ブロックに１校ずつの大学設置を進め、また専門学校の統廃合を図った。その結果、平成10年には、看護専門学校35校、看護大学１校、短期大学１校にて養成をしていたが、平成21年現在、専門学校は17校に、本年秋田短期大学が大学に昇格したことを含め看護大学６校、大学院４校、短期大学１校となった（図１）。

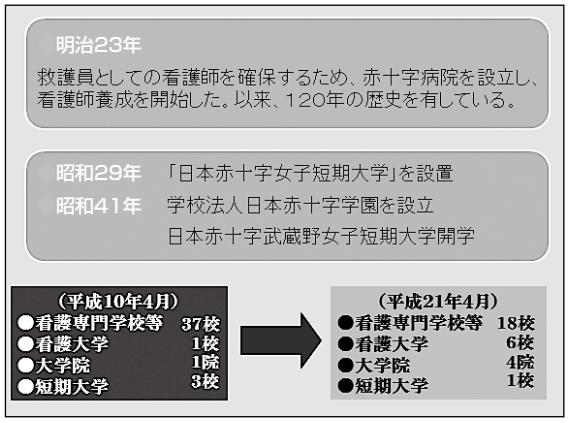


図１．赤十字看護教育の変遷

## Ⅱ．日本赤十字看護学会の誕生と赤十字施設

日本赤十字看護学会が平成12年に誕生した当時、日本赤十字の看護大学は、広尾の日本赤十字看護大学、日本赤十字北海道看護大学、日本赤十字広島看護大学の３校であったが、現在６校となっている。

赤十字の組織には、看護大学、看護専門学校、幹部看護師研修センター、医療施設、福祉施設、血液センターと、保健、医療、福祉施設が多数あり、そこには約３万人の看護師が勤務している。

専門職が質の向上を図っていくには、学会という研究の共有の場が必要である。教育・研究を行う教育施設、保健医療福祉の医療の総合機能を実践する施設、そして、それら全体を包含する学会を有する赤十字は、質の向上を図っていく上で大変恵まれた環境を有している。これらのグループメリットを大いに生かしていくことが望まれる（図２）。

## Ⅲ．赤十字の使命

赤十字の使命は、「人の生命と健康を守り、人権を確保するため、あらゆる状況下において、人間の苦痛を予防・軽減することに国際的・国内的に努力する」ことである。

近年、地球温暖化に伴う気候変動や産業や交通機能

の拡大等により、災害の発生件数は増加し、被害も拡大傾向にある。

近年の報告された災害の被災状況を見ると世界では、1978年から2007年までの10年毎の自然災害による被災者数は増加傾向にあり、直近10年の死者数は103万５千人と急激に増加している。これは、2004年に発生したスマトラ沖地震津波による死者数が大きく影響している（図３）。

災害発生件数は、1995年から1999年の５年間と2000年から2004年の５年間を比較すると、55％増しになっている。

また、災害発生状況を大陸別に見ると（図４）、アジアは全世界の被害者数86％、死者数81％、発生件数37％を示し、最も災害に見舞われている（国際赤十字・赤新月社連盟，2008，pp194－196）。

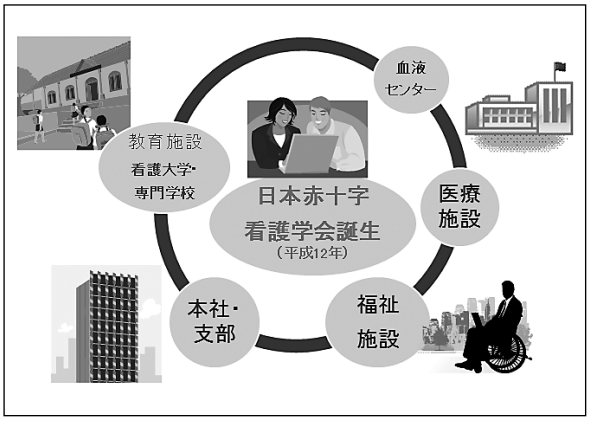


図２．日本赤十字看護学会の誕生と赤十字施設

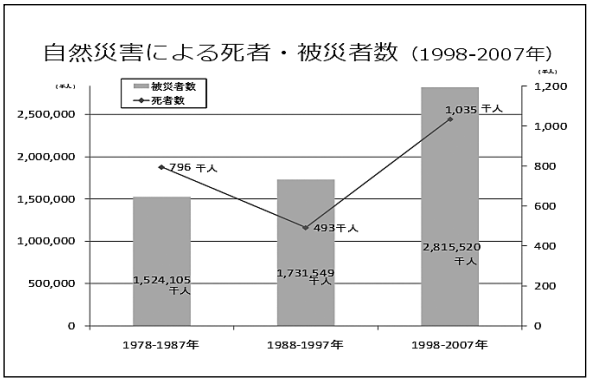


図３．災害発生の状況（1）（世界）

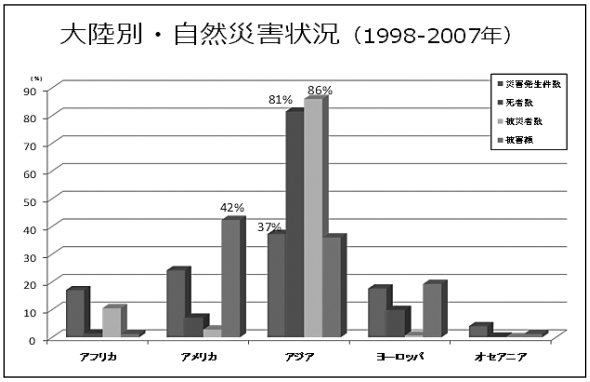


図４．災害発生の状況（2）（世界）

次に、最近の日本における災害発生状況（表１）では、平成７年に発生した阪神淡路大震災、平成16年の新潟中越地震は大きな被害をもたらした。日本は、地震、豪雨等の水害、噴火による災害が多く発生している。

また、自然災害のみならず、現在でも、戦争、紛争、テロ等により、多くの市民を巻き込んで惨状を繰り返している。

人々の生命と健康、人間の尊厳を脅かされている人々がいかに多いかを認識し、その痛みを世界中の人々と共有し、相互に支援することが重要である。

このような状況の中で、国際赤十字・赤新月社連盟は、2010年から2020年までの重点戦略を示した。それは、①災害支援および復興、②災害予防・保健衛生等の開発事業、③人々の孤立、排除、摩擦からの保護である（図５）。

赤十字人は、多くの人々の苦痛の予防、軽減を図ることに努力することが求められている。一人ひとりが赤十字の原則をしっかりと捉え、活動し、あるいは赤十字の思想の普及を図る時である。くしくも、本年は、赤十字思想誕生150周年、赤十字国際連盟創立90周年、ジュネーブ条約締結60周年にあたる（図６）。単なる記念の年で終わらせることなく、これまで、歴史をつむぐことができた意味を捉え、今後いかに発展させていくかが重要である。

## Ⅳ．赤十字看護学会に期待すること

赤十字看護学会に３つのことを期待する。まず、赤十字の原則の探求と普及、次に赤十字と赤十字看護の言語化である。

表１．災害発生の状況（日本）

最近発生した日本の主な災害（救護班20班以上出動）

| 災害発生年月日 | 災害名 | 救護派遣数 |
|---|---|---|
| 平成７年１月17日 | 阪神淡路大震災 | 981 |
| 平成10年８月 | 関東北部と東北部南部を中心とする大雨災害 | 21 |
| 平成12年３月29日 | 有珠山噴火災害 | 52 |
| 平成12年６月～ | 三宅島噴火災害及新島・神津島近海地震災害 | 27 |
| 平成16年７月13日 | 新潟福島豪雨災害 | 31 |
| 平成16年７月18日 | 福井豪雨災害 | 48 |
| 平成16年10月23日 | 新潟中越地震 | 162 |
| 平成19年３月25日 | 能登半島地震 | 24 |
| 平成19年７月16日 | 新潟中越沖地震 | 44 |

（日本赤十字社救護活動の記録より）

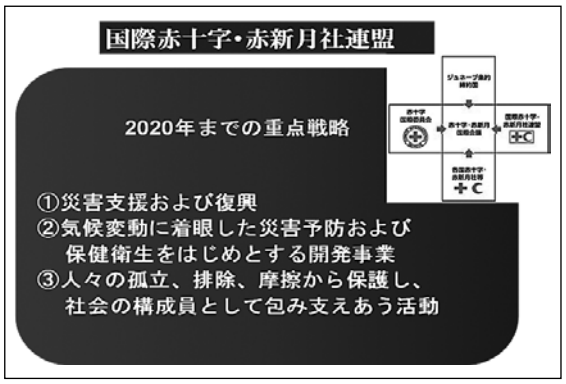


図５．国際赤十字・赤新月社連盟戦略

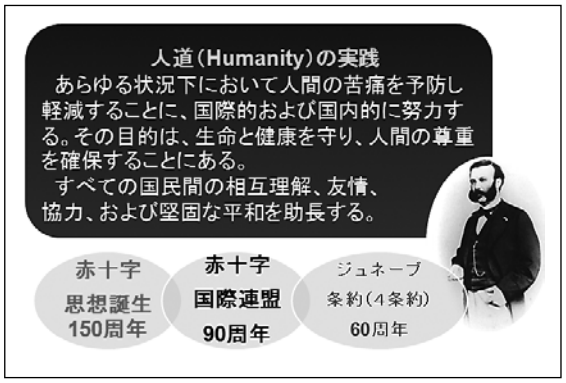


図６．赤十字活動の必要性

図７．日本赤十字看護学会に期待すること（1）

図８．インドネシア災害看護教育支援事業

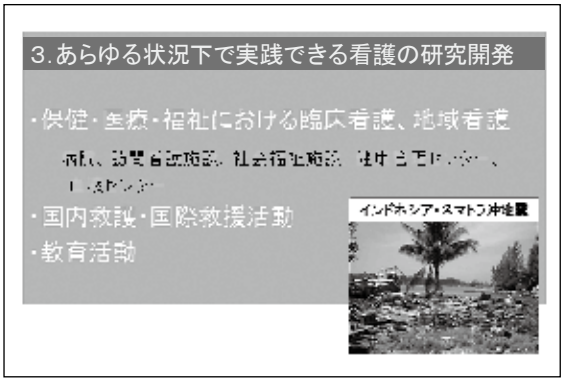


図９．日本赤十字看護学会に期待すること（2）

赤十字の看護は、赤十字の原則を理念とし、また行動のよりどころとして実践してきた。しかし、赤十字の看護実践と赤十字原則の関係性が明確に説明されていない。学会には、「赤十字看護」について、赤十字の過去、現在の看護実践と赤十字原則との関係性を明らかにし、言語化していただきたい。これまでの活動記録から分析し、経験知から形式知へと研究を進め、災害看護学としての学問的体系化と実践への提言を期待する（図７）。

また、赤十字グループの特性を活かして、本社、教育施設、臨床が協働して赤十字事業を実施することによって、事業内容を深め、各組織の業務の発展にも繋ぐことが期待できる。その具体的な例としては、2004年に発生したインドネシア地震・津波後の復興支援として実施した、インドネシア災害看護教育支援事業がある。日本赤十字社が日本赤十字九州国際看護大学の協力を得て2005年から４年間にわたり、インドネシアの看護専門学校に災害看護の導入を図った（図８）。教育活動への介入という専門的な事業の特性から、大学教員の参加は事業の内容を深め、また、参加した教員にとっては、赤十字事業への理解を深め、教育・研究活動へと活かすことが期待できる。今後も、本社、教育施設、医療施設と協働事業を行いながら、活動の意味づけや改善が図られていくことを期待している。

期待したいことの３つめに、あらゆる状況下で実践できる看護の研究開発の推進を期待する（図９）。赤十字は、保健医療福祉における臨床や地域での看護、被災地や医療未発達地域での看護および保健活動など、あらゆる状況下で看護を提供している。これらに対応できる看護や、社会の変化に対応した看護についての研究開発を望む。

赤十字で勤務する３万人の看護師が看護実践、教育活動、救護活動等の課題研究を共有し、向上に向けて結束することによって、飛躍的な発展が期待できる。

表２は、日本赤十字社が平成18年から開始した、看護大学への「赤十字と看護・介護に関する研究助成」によって研究された４年間の研究テーマである。日本赤十字看護学会に期待した①赤十字原則の探求、②赤十字看護の言語化、③看護実践の開発について研究されているが、さらにこれらを実践において検証してい

表２．赤十字看護大学における赤十字と看護・介護に関する研究テーマ

| 領　　域 | テーマ数 | （%） |
|---|---|---|
| 赤十字資料に基づく研究 | 10件 | （21.3%） |
| 災害看護に関する研究 | 7件 | （14.9%） |
| 赤十字原則・看護実践に関する研究 | 5件 | （10.6%） |
| 国際救援要員の人材育成に関する研究 | 5件 | （10.6%） |
| 赤十字事業に伴う研究 | 3件 | （6.4%） |
| 臨床看護に関する研究 | 9件 | （19.2%） |
| 看護教育に関する研究 | 8件 | （17.0%） |
| 合　　計 | 47件 | |

〈赤十字と看護・介護に関する研究助成：平成18年度～21年度〉

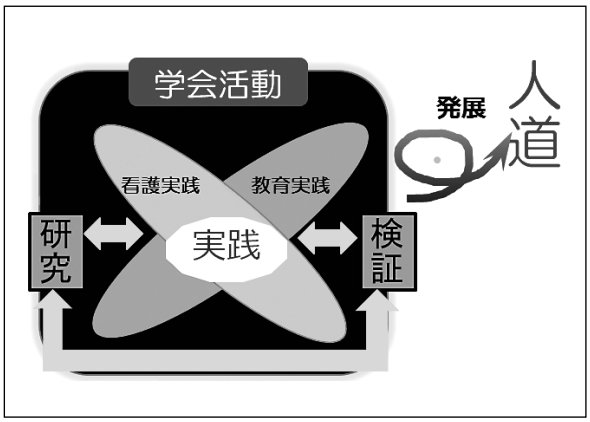


図10．学会の役割（赤十字の発展のために）

くことも必要である。

看護実践、教育実践の中で、学会活動を通して、研究、検証がなされ、より良い実践へと発展していくことが、人道への具現化へ近づいていくという期待と希望を持ちたい（図10）。

文献

国際赤十字・赤新月社連盟編（2008）／日本赤十字社原訳，京都大学防災研究所巨大災害研究センター監訳（2008）．世界災害報告2005年版（pp.194－196）．京都大学防災研究所巨大災害研究センター．